

## 19. 扁桃の類上皮細胞肉芽腫性病変, 16例の臨床病理学的検討

病理学 (形態)

金子有子, 小島 勝, 山岸秀嗣, 正和信英

【目的】扁桃では類上皮細胞肉芽腫形成はまれでありその臨床病理学的存在意義や免疫組織学的所見については殆ど知られていない。本邦における扁桃の類上皮細胞肉芽腫性炎の病態を明らかにするために、私たちは16症例を臨床病理学的、免疫組織学的に検索した。Epstein-Barr virus (EBV) は扁桃に時に類上皮細胞反応を伴う病変を形成するため、EBV陽性細胞の有無も検討した。

【材料と方法】1999年から2012年3月までの間に獨協医科大学病院で扁桃摘出術が行われた全537症例を対象とした。HE染色や種々の特殊染色の他 *In situ* hybridization (ISH) 法を用いてEBV-encoded small RNA (EBER) 陽性細胞の有無も検索した。

【結果】類上皮細胞肉芽腫は537例中16例(3%)に認められた。男女比は1対1、年齢分布は4-57歳(平均23歳)であった。殆どの症例で両側扁桃腫脹、咽頭違和感、発熱などが認められた。サルコイドーシス、結核、クローン病の既往のある症例はなかった。2例では伝染性単核球症の既往歴があった。肉芽腫は3型に分類された。I型肉芽腫は6例でトキソプラズマリンパ節炎で見られるような類上皮細胞が10個ほどまでの小さな集塊を形成し、II型肉芽腫は5例でサルコイドーシス類似の非乾酪壊死性肉芽腫で、III型肉芽腫は5例で、胚中心内に見られる膿瘍形成性肉芽腫であった。*Toxoplasma gondii* は16例すべてで陰性であった。膿瘍形成がみられた5例すべてで、抗酸菌、真菌、バルトネラは陰性であった。EBER陽性細胞は4例に認められた。

【考察】米国(1.8%)に比べ我が国(3%)扁桃の類上皮細胞肉芽腫の出現頻度は高かった。EBVは、扁桃の類上皮細胞肉芽腫の原因の可能性がある。

## 20. 当院各科より紹介され口腔ケア外来を受診した患者における歯・顎骨病変の現状～歯科医院に通院していない患者でも多くの口腔病変が存在している～

口腔外科学

江川祐亮, 土田修史, 宮下 雄, 和久井崇大, 博多研文, 大久保真希, 齋藤正浩, 長谷川智則, 増山恵里, 守田健太郎, 秋山 薫, 永山敦子, 内田大亮, 川又 均

【目的】口腔ケアとは、全身疾患を有する患者が、口腔に存在する疾患、あるいは口腔機能に関連した疾患を治療することにより、全身的な疾患の治療に寄与する医療行為であり、すなわち“有病者の歯科治療”であるとわれわれは考えている。当科では、2007年10月に口腔ケア外来を開設し、各科からの入院及び外来患者の口腔ケアを積極的に行っている。本研究では口腔ケア外来受診患者初診時の歯および顎骨病変の現状について検討を行った。

【方法】2007年10月から2014年7月までに、当院口腔ケア外来を受診した患者3068例の中からパノラマX線撮影を施行し、現時点で口腔内評価が終了した953例について検討した。

【結果】齲蝕を有する患者は722例、辺縁性歯周炎を有する患者は763例、根尖性歯周炎を有する患者は323例であった。顎骨病変は、残根211例・埋伏歯132例・顎骨嚢胞19例・腫瘍性病変4例であった。今回の検討ではパノラマX線写真の診断で89.6%の患者に口腔病変が存在していた。

【考察・結論】適切な歯科治療・メンテナンスを受けていれば、口腔ケア外来受診時には活動性の病変は存在しないはずである。しかしながら、口腔ケア外来受診患者の大半は歯科医院での治療歴はあるが、現在は歯科医院に通院しておらず、定期的なリコールを受けている患者は極めてまれであった。このような状態ではがんや心疾患等に対する治療の妨げになると考えられるため、当科口腔ケア外来への依頼が適切であり、事前の口腔ケアが必須であると考えられた。